

【執筆者の紹介】

大正十四年四月十三日生

昭和十九年二月 千葉県佐倉連隊入隊

四月 中国華南省転属

十月 石頭予備士官学校入隊、第十三期

生

昭和二十年八月 終戦により同校解散

任陸軍軍曹

十一月 入ソ 抑留地コムソモリスク

昭和二十三年六月 帰国

昭和二十四年 岐阜県職員採用試験合格

加茂地方事務所他勤務

昭和六十一年三月 定年退職

(岐阜県 鈴木 善三)

シベリア抑留を思う

岐阜県 小栗 晴美

私は、大正十四年四月二十七日に岐阜県加茂郡坂祝村酒倉において農家の長男として生まれた。坂祝村は現在戸数も増え坂祝町となったが、当時は純農村で、人口も三、〇〇〇人ほどだった。小学校六年を卒業すると旧制中学校に進んだが、その頃日本は、満州事変、日中戦争から太平洋戦争に突入して破滅に向かって進んでいた。こんな中で昭和十八年三月、川崎航空機岐阜工場に就職し、航空機の生産に従事することになった。そのうちに戦況はさらに悪化し、アッツ島の玉砕に始まりガダルカナル島の敗退、ビルマ作戦の失敗、そのうちにB29による本土空襲まで始まった。こんな状況下で、軍の要請で飛行機の増産に追われる毎日だったので多少兵隊になるのは遅れるだろうと期待していたが、遂に昭和二十年三月、名古屋中部第

二部隊に入隊することになった。その頃はフィリピンに米軍が上陸し、日本軍は北の方に追い詰められていたので、半ば死を覚悟しての入隊だった。

入隊するや、その日のうちに満州孫吳の師団通信隊に入ることを申し渡され、三月十二日に空襲で街が燃え上がる名古屋を後にして満州に向かった。約一週間の汽車の旅、三月二十日夜の十二時頃孫吳に降り立った。寒い星のきらめく夜空を見ながら迎えのトラックに乗り、二十分ほどで部隊に着いた。翌日より早速教育訓練が始まり、一期の検閲を六月二十日頃に受けた。

その後同年兵は一等兵に進級したが、私は幹部候補生の集合教育が始まったので、同年兵と別れ、十八人だけの別の教育を受けることになった。そのため日曜日でも外出はなく、通信の勉強の毎日だった。

そして四十五日くらい経た八月九日の朝、朝食の準備中に突如低空で侵入して来る戦闘機を発見した。渡満以来飛行機の爆音は一度も聞いたことがなかったのだが、よく見ると、それはソ連軍のミグ戦闘機だっ

た。やがて部隊長より完全軍装にて正午までに営庭に整列するよう命令が下った。そして午後三時頃には部隊の北にあるソ満国境に作られた師団二万人ほどがそっくり入る地下の永久陣地に入り、地下兵舎での生活が始まった。

その後八月十七日、遅い部隊は師団長命令に従わず八月二十七日頃まで戦闘を続け、十分な武器は皆無、小銃と手榴弾のみでは一方的に戦死者が増えるだけで、一二三師団だけで約千八百人戦死者を出したが、一応生存者は武装解除を受けた。

#### 終戦と收容所入所まで

かくして我々は地下陣地を出て、武器を指定の場所に集積し、丸腰で隊列を組んで侵攻ソ連軍の配備された孫吳の町へ下りて行った。そこには巨大な大型戦車が二十両も並んで砲口を一斉にこちらに向け、ハッチを上げて機関銃も全部こちらに向けている。その中には女の戦車兵も戦車兵の帽子を被ってこちらを見ていたのには驚いた。

どの兵士も異様に鋭い目付きで、独ソ戦の終了とともにウクライナから極東に配置転換された第一線の実戦部隊であった。我々は焼け残った旧兵舎や倉庫等にすし詰めに押し込まれて収容され、何もせずゴロゴロして二十日くらいが過ぎた。

九月十日頃より、千人単位に編成されて、前後左右を自動小銃を持ったソ連兵に警戒され行先もわからないまま出発。九月十五日頃に遂に我々も千人単位の大隊で、毛布、テント、若干の防寒具、食料を持って北の国境に向けて歩いて行った。途中一晩夜営して、二日目の午後三時頃黒龍江岸に着いた。岸近くに夜営をして、翌十一時頃対岸よりソ連の貨物船がこちらに着岸した。すぐ乗船の命令で千人の大隊全部乗船とともに、ソ連領に向かって船が動き出した。河幅約八百メートルの大河であるが、二十分ほどで対岸に着いてしまった。万事休す、黒龍江を下ってウラジオストクを経て「トウキョウダモイ」は嘘であった。もうこうなったら「海となれ山となれ」、生きて内地帰還の夢はもろくも消えた。皆何も言わず一様に黙ってソ連に

上陸し歩いて行った。

ほどなく小さな原野の中の集団農場に着いた。コンスタンチノープルという寒村である。ここで夕食をとり、テントで入ソ初めての夜営をした。持参のテントを二枚合わせにして張り、その中に、下にテントを一枚敷いて六人単位で横になった。九月二十日過ぎのシベリアの夜は霜が降り寒い。体を寄せ合って体温で互いに温めても、これからどんな運命が待っているのか不安で眠りにつけない。そのうちに昼間の行軍の疲れから寝入ってしまった。

翌朝目が覚めると早速食事、行軍が始まる。途中三カ所ほど農村で二、三日農作業をして、約一カ月をかけて八千キロメートルほどを奥地に向かって歩いた。何ぶん重い二十五キログラムほどの荷物を持つての行軍で、重い足でや々と目的地に着いた。ライチハという炭鉱町である。高い鉄条網に囲まれた、四隅には監視のための望楼のある収容所である。まるで罪人と一緒で、先着の大隊もあり、三千人ほどが収容された。宿舎は半地下の木造で洞穴のようである。ちょうど長

い牛舎を半地下にしたようなもので、真ん中に通路、両側に二段に板を並べてベッドにしてある。その上段にゴロ寝で一棟に百五十人くらいが入った。

昼間は医師の診断を受けて許可がなければ休めない。零下四十度にならない限り、外の露天掘りに、石炭の炭坑道路の新設、建築工事等にノルマで追い立てられた。一〇〇%ノルマができなければ食事が減らされる。空腹に僅かな黒パンと水ばかりのスープで一食である。重労働、酷寒、貧弱な食事では体がもたない。入ソ半年で二十一年の三月頃には皆骨皮の目ばかりギョロとした栄養失調になってしまった。そうなる人間は最後は食欲だけの餓鬼のようで、食事の分配で小競り合いが起こったこともあった。全く悲惨なことである。春ともなれば野原のタンポポ、にら等はもちろん、口へ入るものは何でも食べた。戦友との話は内地での白米の飯、さしみ、餅等食べる話ばかりで、あさましい限りであった。

夜ともなれば、寝具といっても旧軍隊のスリ減った毛布各人一枚だけ。そこで三人一組で三枚を、下に一

枚、上に二枚をかけ、三人が丸太のように体を寄せ合って寝る。三十メートルほどの宿舎の真ん中の鉄板でドラム缶のような形に作ったストーブで不寝番が交替で石炭を焚く。それでも三人仲間の上段に二枚かけた毛布だけでは寒くてなかなか寝つかれない。そのうちにお互いの体温と昼間の疲れで眠りに入る。しかし端の方でストーブより遠い人たちは寒さで目が醒める。吐く息が白い。まるで内地の戸外の冬である。こんな中で一夜明けると、朝になっても起きて来ない、よく見れば死んでいる。こんなことが毎朝で、昭和二十一年の二月頃には朝に十人くらいの死亡者が出ることもあった。しかし毎日のこととてさして驚かなくなった。神経まで麻痺してしまったのだろうか。収容所全員で三千人くらいのうち六百人以上は死亡したと思う。しかしその中で、これだけは是非皆さんに伝えなければということがある。それは、そんな貧弱な食事のために栄養失調で無念にも戦友が死亡する中で、我々三千人ほどの食糧を収容所の所長が「ピンはね」をしていたのである。その所長は五カ月ほどで左遷された

が、若手の共産党員で、政治部将校の大尉であった。全く鬼畜の如き人物である。そのために幾多の戦友が死んだかと思うと、いまだに忘れることが出来ない。

### 入院と政治教育

そのうちに私もアメーバ赤痢にかかり入院、ザビタヤのソ連軍の病院に送られた。軍医を初め掃除夫に至るまで皆ロシア人で、言葉は通じず大変不安であった。

満足な薬もなく、ただ安静にして、米の少し浮いているようなお粥を茶碗に一杯が三度の食事であった。それでも幸い一カ月半くらいで退院し、ライチハの収容所へ帰った。この病院でも多数の人が死亡した。運良く助かったが、病院帰りでは重労働は無理で、十五キロメートルくらい離れた農場の軽作業に送られた。ジャガイモ掘り、トマト・きゅうりの除草・収穫、煙草苗の植付け・除草等をやった。冬場になれば薪取りで、二人引きの大鋸で大木を倒し、馬車に積めるよう二メートル五十センチくらいにして馬車に積んで帰る

毎日である。鋸引きも空腹では力が出ない。

夏のある日突然ライチハの本部より呼び出しがあり、身の回りの品を持って出頭せよと指示があった。何事かと急いで行くと、ハバロフスクにあるマルクス・レーニン主義の政治学校に一カ月半くらい派遣された。あまり共産主義教育はありがたくないが、ノルマで強制労働に追われるよりは体が楽と、早速汽車でハバロフスクへ出発した。着くと直ちに共産主義教育が始まった。嫌な優柔不断な態度を見れば直ちに反動分子として吊るし上げられる。仕方なく心から信奉したような顔をしていれば毎日が過ぎて行く。やがて一カ月半が過ぎてライチハの近くの農場に帰った。早速政治部将校に呼び出され、今まで習得したことを戦友に広めるよう指示された。

これは困ったことになったと思ったがやむを得ず、日本語の新聞が週一回配達されるので、その解説等をやった。しかし戦友の前で「アジる」ようなことは死んでもやるまいと思った。そのため、お前は積極性がないなどと文句を言われた。しかし仕事だけは仕方

なく真面目にやったので、反動分子とは言われなかった。

### 夏の草刈りと内地帰還

集団農場での作業も三年余りを経過し、その中で気候にも若干馴れ、作業の要領も分かり、少し食事も改善されたので死亡者はほとんどなくなった。また昭和二十二年春頃より病弱者を優先して内地帰還が始まったので、多少気分的にゆとりができた。

三年目の夏からは、この農場で最も作業のきつい草刈りに出るようになった。これは刃渡り七十五センチくらいの鎌に一・八メートルくらいの細い丸太の柄をつけた大鎌、これをただ振るだけでも体力が消耗するのに、実際に野原で草を刈るとなれば足を地にしっかりとつけて一日中振り回すので腹の皮もよじれてしまう。酷寒のシベリアでも真夏の直射日光はかなり強い。流れる汗と蚊とアブに襲われる。帽子の上から内地の蜜蜂業者のように蚊帳のようなものをかぶらなければとても仕事にならない。流れる汗が目に入って目

が充血して真っ赤になってしまう。そんな作業を六、七、八月の三カ月続けるのである。

幸いにその昭和二十三、四年の二年は体調も良かったので耐えることができた。そうしてできた干し草は、草原の中に卵を半分に切ったような形にしっかりと踏みつけて、高さ二・五メートル、直径三メートルくらいに野積みする。それは冬場の大切な牛馬の飼料にするので大事な仕事であった。

その年昭和二十四年の八月二十日過ぎ、草刈りの作業も終わる頃、朝十時過ぎ作業に出発するために整列して、昨日刈った草がある程度乾燥したので野積みにする作業に出る時であった。ライチハの本部より乗馬の伝令が飛んで来て、直ちに身の回りの物を持ってライチハに集合し内地に帰還するという命令が伝えられた。飛ぶようにしてライチハへ行ってみれば、三千人ほどいた日本人も残りわずか五百人ほどになっていた。この五百人も、十月には全部帰還したという話である。鼻唄まじりで貨車の人となり、ハバロフスクを経て三日後にナホトカに着いた。しかし、まだここで

も反ソ的言動のあった人はシベリアの奥地に逆戻りで、また一年ほど帰還が遅れたということがあったというので、言動には充分注意するように言われた。

しばらく日本からの輸送船の来るのを待って、九月二十日頃に英彦丸が入港して来た。タラップを上がって、デッキの上で日本人の船員、看護婦さんを見た時の嬉しき、足が地につかぬとはこのことである。やがてドラの音と共にゆっくりと岸壁を船が離れて、貨物船なので貨物室にゴロリと横になった時は、まずこれで命は助かったと思うと四年間の抑留生活が走馬灯のように頭の中を駆けめぐった。三日目の昼頃、誰かが内地の山が見えると大声で叫んだ。飛び起きて甲板へ出ると、まだ遠いが、しかしはつきりと山が見える。ほどなく舞鶴に入港。上陸して身体検査を受け、三日ほど書類上の手続きを経て故郷へ帰った。こうして四年にもなった強制抑留は終わった。

その後約五十年、割合体調もよく、現在は家内と長男夫婦らと六人で生活している。娘も市内に嫁し、孫三人も時々立ち寄ってくれる。帰国後、日本の社会の

すばらしい発展をした恩恵を充分受けて人生を送ることができたことを感謝している。

それにつけても、彼の地で無念にも亡くなった戦友達のことは一日も忘れることができない。

シベリアの凍土に眠る英霊よ安かれと祈る。

#### 【執筆者の紹介】

大正十四年四月二十七日生

昭和二十年 三月 名古屋中部第二部隊入隊

孫呉満州第一二三師団通信部隊

転属

六月 幹部候補生集合教育に参加

八月 終戦

九月 入ソ 抑留地ライチハ

昭和二十四年九月 帰国

以後、家業に従事

(岐阜県 鈴木 善三)